

健康文化

## 幸せの詩

今井田 二三子

幼い日、琴爪の入った袋を母親から前掛の紐に結んでもらい琴の稽古に通った日のことを老婆は目を細めて時々周囲の人々に語っていました。兄弟、姉妹が多いため琴爪の袋を結んでもらう時が唯一母親の目が自分にだけ向けられる至福の時であったのかも知れません。

さて、演奏の腕前はどうかであったのか、老婆の琴の調べを耳にした者は誰もありませんでした。昔、農家に嫁いできた頃、薄暗い台所の隅で夕食の支度をしながら六段の調べを口ずさんでいたのを聞いた者はありませんでしたが、それが六段の調べであるのに気付いたのはずっと後になってからのことでした。

小さな町の製糸工場の生家から農家に嫁いだ最初の頃は、生活のあまりの違いに戸惑ったようで、藁で風呂を沸かすように言われた時は、煙突のない竈の口からもうもうと舞い上がる煙に髪は煤け、藁を掴む手は輝で痛み、辛さで生家が恋しくなったものだと言っていました。田畑の耕作に来られる数人の男衆の食事の支度、子供や家族の世話に追われ、食事の時だけがやっと座ることができた時間であったようです。小学校へ入学した長男を送り出すため隣家近くまで行くのが唯一許された外出の時間で、帰りは六段の調べを口ずさんだり、カチューシャの歌を歌いながら門前まで戻ると、それからはそそくさと家の中へ入り昼食の用意に取りかからなければなりません。漸く農家の主婦になりきった頃、末の子供が幼くして他界しました。幼児期に乳母車から落下したのが原因だったのでしょくか、痙攣を起こすようになり、その子を遠くの小児科へ連れてゆくのに朝早く乳母車を押して出かけてゆきました。やがて還らぬ子となったのを悲しむ間もなく、脳出血の後遺症で長い間療養していた夫が亡くなり、その翌年には姑が発病、姑の薬を岐阜のY医院までもらいに行った帰りに空襲警報に遇い防空壕の中に足止めをされたり、不通になった電車の線路づたいに何キロかを歩いたとか、姑の他界の翌々年には姑の義姉が発病、そして他界、更に数年後には長男の発病と約十年の間に家族五人を看取り、野辺の送りをすます間は、例の六段の調べを耳にすることはありませんでした。さすがに長男の他界は、大きな痛手であった様子で、朝夕の読経の時間が長く

なり、近所の人を訪れて声をかけてもなかなか仏間から返事が返ってこなかった様子でした。やがて心の整理をどうつけたのか読経がすむと鍬と鎌を乳母車に入れて何事もなかったかのように畠に出かけるようになりました。周囲の者は、慣れない畠仕事に、やがて弱音を吐いて田畑を手放すだろうと囁きあっていましたが、予想に反し楽しげで、後日、知人に語ったところを聞きますと「春に先がけ梅の花が咲き、花の間で鶯が鳴き、桃の花が彩りを添え、菜種の花が黄色の毛氈を敷きつめたように広がり、畠は楽園」だったそうです。それもその筈、畠仕事をしていると通りすがりの知人が立ち寄り、何時の間にか花の下会議が始まり、そのうち畠の隣の家からお茶の差し入れがあったり、畠は時には青空社交場と化していたようでした。

長男を亡くした痛手が薄らぎかけた頃、今度は一人残った娘がまた病魔に侵され長期の療養を余儀なくしなければならないことになりました。その頃、老婆の箆笥の中は殆ど空の状態になっているのに気付く人はあまりありませんでした。娘の病状は一進一退で快復の望みは少ないと思ったのでしょうか、或る日突然、病床の娘に向かって「後のことは心配しないで死んでもいいよ」と告げました。この言葉を聞いた娘は、言葉の意外さに驚き、将来に対し絶望的な思いはしましたが、不思議と残酷な言葉とは感じませんでした。それが親としては断腸の思いの究極の思いやりと、安心をさせるための言葉であったと理解できたのはかなり後になってからのことでした。

数年後、テレビの番組でエイズの問題が取り上げられ、あるアメリカの女性が、エイズの末期の状態で苦しんでいる夫の痛ましさに耐えきれず同じような言葉を告げられ、数日後、その御主人は安心したかのように安らかに奥さんの腕の中で息を引き取られたというのを見て、洋の東西を問わず同じような思いをする人があるものだと感動しました。

その頃には主婦は老婆に変わり、六段の調べは何時の間にか戦前の小学校唱歌の水師営の会見になり、幸いに病気のトンネルを潜り抜けた娘も働くことができるようになっておりました。その娘を容赦なく叱りとばした後、調子はずれの水師営の会見を口ずさみながら畑仕事に出かける後姿を眺めながら、幸せとは何だろうか、何物にも捕らわれない心、不幸を断ち切る力、大いなるものを信じることができること、それが幸せの詩につながるのではないかと思ったものでした。

この老婆が私の母でした。

(内科開業医)